

自然の叡智「愛・地球博」 芽生えさせよう共生の理念

新世紀初の万国博覧会が三月二十五日から百八十五日間の日程で、愛知県の名古屋東部丘陵地の長久手、瀬戸両会場で開催されている。筆者は、同会場を選挙区に持ち、誘致運動など当初から関わってきた。環境共生の理念と市民参加の観点から今日の開催に至った「博覧会の意義」などを熱く語る。

二十一世紀初の博覧会、感動の開幕

天皇后両陛下、皇太子殿下をお迎えし、百二十か国を超える参加各国代表や小泉総理をはじめとする内外の賓客・関係者二千四百余名を集めての日本国際博覧会「愛・地球博」の開会式が、三月二十四日(木)に行われた。陛下がお言葉を述べられたあと、博覧会の名誉総裁をつとめられる皇太子殿下のスイッチオンにより、いよいよ向こう百八十五日間の博覧会が始まった。わが国にとって、一九七〇年(昭和四十五年)の大

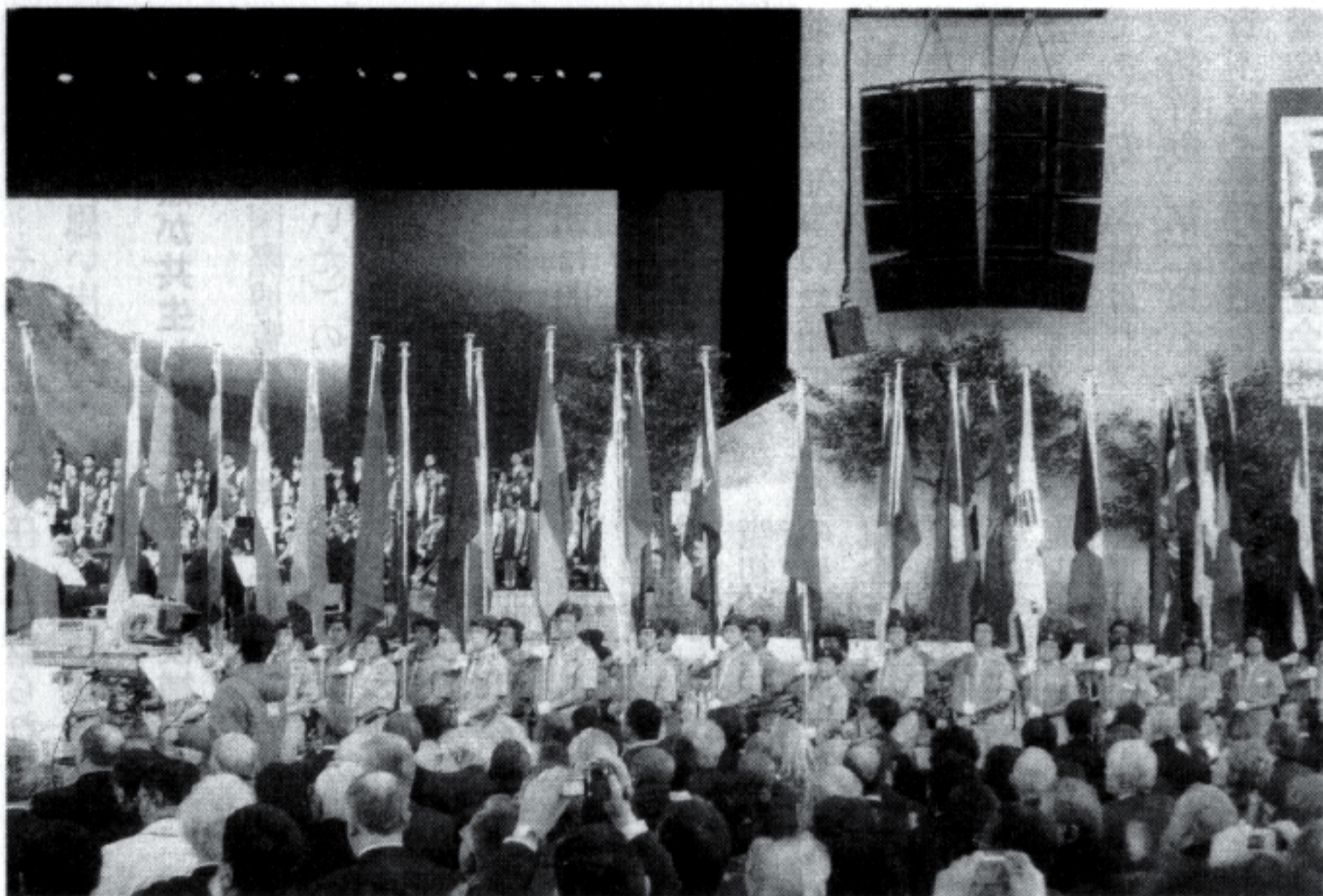
阪万博以来、三十五年ぶりの大型博覧会の開幕である。

感動的なすばらしい開会式であった。かけがえのない母なる大地・地球環境に思いを馳せ、それを守り、未来の子供たちに、この美しい星を受け継いでいこうというメッセージと優しい気持ちにつつまれた式典に、会場の心は一つになり、多くの出席者の頬には涙が伝った。

式典に引き続き行われた、海外からの著名な演奏家

衆議院議員

鈴木淳司



感動につつまれた「愛・地球博」のオープニング(平成17年3月24日)

で構成されたEXPOスーパーワールドオーケストラの演奏を聴きながら、私の心は、瞬時に一九九七年六月十二日のモナコ、即ち今回の博覧会が、BIE(国際博覧会事務局)の総会で決定した、モナコのその日に飛んでいた。

私は当時、開催候補地である地元の地方議会議員で構成された二〇〇五年国際博覧会誘致推進議員連盟の事務局長をしていたが、議連の仲間や、地元よりはるばる駆けつけた多くの市民と共に、開催地の決定されるその瞬間を迎えるべく、その日、BIE総会の開催されるモナコに居た。

暑い一日であった。日本とカナダ(カルガリー)の決選投票になったその日、モナコのホテル前は、両国の代表団、応援に駆けつけた関係者、それに両国のマスコミによって、騒然たる雰囲気であった。「ジャパン」「カナダ」…一票ごとに開票され、日本が正式に二十一世紀初の大規模博覧会の開催地に選ばれたが、その光景は同時中継によって愛知県や開催地元市町村に流されていた。「勝ったぞ!」「万歳!」…興奮につつまれる関係者をよそ目に、私はその瞬間、正直言ってしまうというより「これで本当に決まった。これはたいへんだ」「いよいよ世界に公約した環境博を実現し